様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０２５８

研究課題名（和文）スミスにおける共感と自己保存の原理の学史的再構成：経済学の進化心理学的基礎

研究課題名（英文）Adam Smith's Theory of Self-preservation and Sympathy in the History of Economic Thought: Evolutionary Psychology as a Foundation of Economics

研究代表者
高　哲男（TAKA, Tetsuo）

九州産業大学・経済・ビジネス研究科・教授

研究者番号：９０１０６７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の４点である。１．アダム・スミスの『道徳感情論』と『国富論』とが直接理論的に関係するのは、『道徳感情論』の「正義論」と『国富論』第５編「国家の役割」特に「法の整備と教育、学術と芸術の振興」である。２．『道徳感情論』の「効用」論の眼目は、身体的効用と「公共の利益」とは「本来異なる」ことの明証である。３．『道徳感情論』加筆修正過程でのスミスの苦労は、「公平な観察者」の役割が「神」と無関係であることの説明であった。４．従来のスミス研究が見逃してきたが、彼は1768年からエジンバラ音楽協会の会員で、オペラやオラトリオにも造詣が深かく、純粋な器楽曲が「情動をかき立てる」理由に注目した。

研究成果の概要（英文）：Significant results are next four points. Firstly, the discourses on “justice” in TMS had close and direct connections with Smith’s arguments on the role of the state, especially of the promotion of education and arts in addition to the establishment of better and workable regal system in WN. Secondly, the main point in the discourses on “utility” of TMS was the distinction between personal utilities and “public utilities” both being confused frequently. Thirdly, the most careful works on the revising process of TMS were to give distinct conception of “impartial spectator” without referring to any “God.” Fourthly, although no biographical scholar ever mentioned, Smith was one of the members of The Edinburgh Musical Society from 1768 to 1790 and loved Corelli and Handel, so that his frequent mentions on music and musical harmony came directly from his own experiences and enjoyments rather than book readings.

研究分野：経済学史・思想史

キーワード：アダム・スミス　共感　道徳感情　正義　効用　自己愛　思いやり　進化心理学

１．研究開始当初の背景

日本でのスミス研究は、神学からの解放と自然法思想という枠組みの中で再解釈を試みたり、エジンバラ講義などに散見される初期構想がスミス自身の経済学の形成と展開の過程で担っていた意義に着目したり、さらには、行動経済学的視点から『道徳感情論』を中心にスミスの人間学を再評価したりする研究などが、国際的な研究動向に目配りしつつ遂行されてきている。だが、『道徳感情論』だけでなく、『国富論』についても、スミスがなぜ労働価値論や価格構成論を展開したかとか、「政府のなすべき義務」について、たんなる放任主義にとどまらず、かなり積極的な提案をしたのはなぜかなどという点については、海外も含めて、近年ほとんど研究されてこなかった。

このような状況を念頭に、遂行されるべき課題を、以下の 3 点に絞り込むことにした。

（１）スミスの科学方法論は、通説的に指摘され、ほとんど疑問視されてこなかったニュートン的方法ではなく、むしろ、ダーウィン的な方法であり、進化論的発展の理論として展開されたのではないか。

（２）共感をことごとく効用から説明しようとした D.ヒュームに対するスミスの異議・批判が示すように、スミスは身体的効用と公共の効用、自己保存と種（手段）の保存とを明確に区別したうえで、両者は「入れ混じっている」という多面的・多層的人間本性把握を持っていた点で、ダーウィンと共通性があること。

（３）現代の経済社会を効果的に分析するためには、古典派経済学や新古典派経済学のモデルに依拠するだけでは不十分であって、基礎に据えられるべき「人間」の理解つまり哲学的基礎を、進化生物学や進化心理学的な人間理解に求める必要があり、そのうえで改めて、「功利主義」の思想と理論がもつ現代的な意義を再構成・再評価しなければならないのではないか。本研究は、そのような試みの一環である。

２．研究の目的

本研究の目的は、それぞれ独立に研究・解釈され、全体の統一性が後で議論されてきた『道徳感情論』と『国富論』について、以下の点を特に重視して、統一的な体系として再構成することである。

（１）前者第二、三、四版および第六版の修正加筆を統一的な「論理体系の拡充」として再構成すること。

（２）それが『国富論』執筆時における研究の方法、第一・二篇の理論や第三篇の歴史・制度論とどのように理論的に関連するかを解明すること。

（３）スミスが人間行動の基本的原動力とした「共感」のメカニズムと、「利己心＝自己利益」を基礎に論理的に導出した「公平な観察者」と「自然価格」の概念・理論の本質的特徴が、ともに人間行為の社会的結果＝安定性を確保する機能にあること。

（４）行為の原因＝動機と社会的結果との関連づけの仕方（進化心理学的方法）にスミス独自の方法論的特徴があること。

以上の 4 点を、厳密な文献考証に基づいて解明することである。

３．研究の方法

研究の方法における特徴は、スミスが描いたことが確実な文書に限定して、その綿密な検討をつうじて、スミスの主張の特徴を明確にすることであるが、『道徳感情論』の場合は、特に初版、第二版、第四版と第六版における修正・増補のプロセスを厳密にフォローしておく必要がある。今回は、予定していた約半分しか達成できなかったが、それでも、かなりの新発見があった。

さらに、スコットランド国立図書館におけるスミスの手稿の調査や同図書館のレファレンスで当時のエジンバラにおける音楽活動に関する文献調査をつうじて、スミスがとても音楽好きであり、１７７８年以降エジンバラ音楽協会の会員であったという事実を確認できたこと、および、ロンドンのリンネ協会でのリンネの文献調査などにもとづいて、従来の通説的な、場合によっては「思い込み」にもとづく解釈を少しずつ訂正する作業と並行して、論文の構想と執筆を進めているところに、新しい工夫がある。

とはいえ、進めば進むほど、資料の持つ新しい意義がわかってきて、「終わりはない」のだが。ただし、インターネットが発展したおかげで、資料の所在調査や博士論文の閲覧など、現地での資料調査に要する時間は、大幅に短縮できるようになった。さらに特筆すべきは、アダム・スミス文庫クラスの文献であれば、安価なリプリントがとりあえず利用でき、これまた、時間の節約に大いに役立てることができた。

４．研究成果

（１）『道徳感情論』の新訳を、OED に依拠しつつ大胆に現代語化し、若い人にも理解し易いように工夫するとともに、スミスが参照していた自然史関係図書や生物学研究の成果などを、現代生物学とくに動物行動学の成果を織り込みつつ、「進化心理学」の先駆者として位置付けることが可能であると、解説しておいた。

（２）1920 年代のアメリカでは、J.M.クラークを中心に「スミス復興」が叫ばれたが、それは、アメリカ制度学派の運動の成果であっただけでなく、ニューリベラリズムの改革運動と深いところで結びついていた。

（３）スミスの「共感」の体系は、ニュートン主義を標榜してやまなかった D.ヒュームのような「物理学的」システムとしてではな

く、現代の動物行動学や進化心理学が明らかにしつつある「心の理論」に近いものとして、組み立てられている。それゆえ、身体的効用と公共的効用の違いが『道徳感情論』第四部で強調され、両者を単純に結び付けるような理論は社会理論として根本的な問題を抱え込むと、厳しく批判したのである。

（４）『道徳感情論』と『国富論』とが、直接論理的に接合し、照応関係を保持している箇所は、『道徳感情論』第三部の正義論と『国富論』第五編「国家の役割」とくに「法の整備と教育、学術や芸術の振興」とである。つまり、「効用（自己利益）を追求するだけの社会」で成立する「正義」は「十分なものにはなりえず」、「社会を支える柱となりうるような正義」が実現される必要があるという『道徳感情論』の主張は、政府や国家の役割がどのようなものであるかを明確に示唆しているのであるが、それは、たんに「国防と司法」に留まるものではない。従来の研究では、「公共事業」論は経済発展のための基盤整備と解釈されてきたが、スミスの主張は、むしろ経済発展のための「人間的資質の育成と発展」に向けられていた。その点で、成人教育の箇所で「科学や芸術の振興」をするのが政府の義務だという主張の持つ意味はきわめて大きいし、株式会社など、新しい法律の制定についても、同様なことが指摘できる。

（５）長期にわたる『道徳感情論』の修正・増補過程でスミスが最も苦労した点は、「公平な観察者」概念が、神学的な意味をまったく持たず、むしろ環境としての社会における一般的な「行為原則」の形成過程における中核的な概念になることを、自己利益と他人への関心という二重の「人間本性」把握から、社会形成のロジックを組み立てなおすところにあった。この点は第二版、第四版における修正と増補のプロセスから十分明確であるが、最終第六版に至って「神学的なアナロジー」はすべて削除されたことから、一層明らかなところである。スミス自身はヒュームほどの無神論者ではなかったが、そのような表明を一貫して回避し続け、内容的には、無神論者に近かったといっても過言ではない。

（６）スミスの「蔵書」目録から容易に判明するところだが、スミス自身の「科学」に対する関心を「蔵書数」から判断する限り、天文学よりも、自然史や文化人類学（新大陸の旅行記など）、音楽関係のほうがずっと多い。スミスの科学方法論はいわゆる「天文学史」におけるニュートン主義にあるというのが通説であったが、これは正しくない。スミスの方法論は、物理科学的な「因果関係」というよりも、人間固有の考え方や振る舞いが、どのように出来上がるのか、つまり「心」はどのようにできて、作用し、変化するのかという点に向けられており、特に『道徳感情論』が、自然史、文化人類学的人間観察、音楽における情動の生成という「心の理論」を模索するような成果をもたらした最大の要因であることが、おおよそ分かってきた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

① 高　哲男、アダム・スミスの『道徳感情論』初版第 3 部の改訂・増補プロセスについての一考察――Gilbert Elliot 宛の手紙を手掛かりに――、エコノミクス、査読無、第 20 巻第 3 号、2016、1-38

② 高　哲男、アダム・スミス『道徳感情論』における「効用」概念の重層構造――「正義」との関連性を手がかりに――　、同志社商学、査読無、66 巻 5 号　2015、1-27

③ 高　哲男、19 世紀末から 20 世紀初頭アメリカにおける経済学史研究の特徴、経済学史研究、査読有、第 55 巻 1 号、2013、75－84

④ 高　哲男、自己愛と思いやりと社会――アダム・スミス『道徳感情論』、『本』（講談社）2013 年 7 月号、10－12

〔学会発表〕（計　2　件）

① TAKA, Tetsuo. On the Meaning of the Layered and Evolutionary Structure of “Utility” in Adam Smith’s *Theory of Moral Sentiments*, The 12th Conference of the International Society for Utilitarian Studies, Yokohama National University, Japan, 20-22 August 2014

② TAKA, Tetsuo. Instinct as a Foundational Concept in Adam Smith’s Social Theory: Biological Understanding of Human Nature in TMS and WN. The 2014 HETSA Conference, University of Auckland, New Zealand, 11-12 July, 2014.

〔図書〕（計　3　件）

① 高　哲男、ソースティン・ヴェブレン『有閑階級の理論』増補改訂版：付論「経済学はなぜ進化論的科学ではないのか」、翻訳と解説、講談社学術文庫、2015、429

② 高　哲男 他１名、経済学史のエッセンシャルズ、知新出版研究所、2014、177

③ 高　哲男、アダム・スミス『道徳感情論』の翻訳と解説、講談社学術文庫、2013、697

６．研究組織
(1)研究代表者
高　哲男（TAKA, Tetsuo）
九州産業大学・大学院経済・ビジネス研究
科・教授
研究者番号：９０１０６７９０